

---

# 白薔薇姫と黒薔薇姫

月宮紫苑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白薔薇姫と黒薔薇姫

### 【Nコード】

N2384BA

### 【作者名】

月宮紫苑

### 【あらすじ】

このアルフォード帝国は世にも不思議な国家だった。1つの国に王が2人。表の権力を支配するのは白薔薇姫。裏の権力を支配するのは黒薔薇姫。いつのころからかこの国の権力は2つに別れていた。1つの国に王が2人。奇妙な歪み。

ルーシエとルージュはそんなアルフォード帝国の時期皇帝。  
時期白薔薇姫と黒薔薇姫。

ルーシエは白銀の髪に白に近い銀の瞳。

ルージュは漆黒の髪に闇のような黒の瞳。

2人はとても仲の良い双子の姉妹。

ジャックはルーシエの守護者。

生涯の忠誠をルーシエに誓う、ちよつと鈍感な優しい男の子。

ヴィンセントはルージュの守護者。

生涯の忠誠をルージュに誓う、賢く皮肉やで、綺麗な男の子。

2人はとても仲の良い親友。

だが、この国の奇妙な歪みは2人の仲を切り裂いた。

仲の良かった2人は互いに睨みあう。

まるで互いが憎い敵であるかのように。

## 第1話 2人の薔薇姫と2人の守護者（前書き）

はじめまして。

月宮紫苑と申します。

この小説の更新は1ヶ月に1度くらいのスローペースとなるかと思っています。

もし、この小説を気に入ってくださった方がいらっしやったら、気長に応援してくださいと嬉しいです。

## 第1話 2人の薔薇姫と2人の守護者

今から1000年ほど前の話。このアルフォード帝国にそれはそれは美しく、聡明な双子の姫君がおりました。

1人は白の髪に白の瞳。

もう1人は黒の髪に黒の瞳。

その美しい容姿から白薔薇姫と黒薔薇姫と呼ばれるようになりました。

2人はとても賢く、同時にとても仲が良かったそうです。

人々は噂しました。

次の国主となるのは白薔薇姫か黒薔薇姫ではないかと。

白薔薇姫と黒薔薇姫の臣下達は互いに激しく争いました。

多くの血が流れ、2人はとても悲しみました。

ある時、2人とある臣下が言いました。

白薔薇姫と黒薔薇姫。どちらかが死ねばこの争いは終わると。

2人は必死に考えましたが、どうしても互いを殺すことはできませんでした。

2人は共に死のうと決意し、毒を飲みました。

共に死ねば冥界ではずっと一緒に幸せに暮らせると信じて。

しかしその夢は叶いませんでした。

臣下達が2人を見つけたからです。

王様はこのことを知って怒り狂いました。

臣下達が白薔薇姫と黒薔薇姫を追い詰めたからです。

王様は2人の姫を追い詰めた臣下達を処刑することにしました。

けれど、白薔薇姫と黒薔薇姫は王様に言いました。

臣下達を許してほしいと。

王様は優しい白薔薇姫と黒薔薇姫に免じて臣下達を許すことにしました。

白薔薇姫と黒薔薇姫はさらに言いました。

次の王様は私達以外の者にしてほしい、私達のどちらかが王になつては争いを生んでしまふ、と。

王様は困りました。

次の王様には白薔薇姫か黒薔薇姫のどちらかにするつもりだったからです。

王様は考えて考えて、1つの良い方法を思い付きました。

白薔薇姫と黒薔薇姫、両方を王にすれば良いのだと。

こうして、白薔薇姫と黒薔薇姫は2人仲良く王となりました。

争いごとも起こらず、2人は幸せに暮らしました。

めでたしめでたし。

アルフォード帝国第7皇女 アンジェリー

ナ・リーン・アルフォード作 白薔薇姫と黒薔薇姫物語より

とある城の廊下で、ジャックは自分を呼ぶ声が聞こえ、後ろを振り返った。

「ジャック！ジャック！！」

「ジャック！聞いて！」

にっこりと笑って駆け寄ってきたのは、顔のよく似た2人の少女。

1人は輝く白銀の髪に限りなく白に近い銀の瞳。  
もう1人は艶やかな漆黒の髪に同じく漆黒の瞳。

「ジャック！今日はね……」

「お姉様とアンがここにいらっしやるの！」

「もう！私が言おうとしたのにッ！ルーシエったら！」

「良いじゃない！どっちが言っただって！」

言い争いを始めた2人にジャックは苦笑した。

「ルーシエ様もルージュ様も喧嘩はダメですよ？」

「「喧嘩じゃないものッ！！」」

これまた息がぴったりな2人。

自分よりも1つ下の2人の女の子。

白銀の髪の子がルーシエ、漆黒の髪の子がルージュである。  
今よりもずっと幼いころから一緒にいるせいか、自分にとってはど  
ちらも本当の妹のように大切な存在だ。

「喧嘩ではなかったんですか。それは失礼しました。」

ジャックは優雅に低頭した。

淡い微笑を浮かべながら。

ルーシエもルージュもこういうことを決して認める性格ではない、  
とこれまでの経験から理解している。

それを見て2人は満足そうに微笑んだ。

「わかれば良いのよ。私とルージュは喧嘩なんてしないもの！」

「ルージュ、そんなことより……。」

「わかってるわ、ルージュ。だからジャック、今日の夕食はお姉様とアンの分も用意しておくように言っておいて。」

「わかりました、ルージュ様。」

にっこりと笑って了承した。

「ジャック、厨房で頼んだら、すぐに私達の部屋にきなさい。ヴィンセントも一緒にね！」

「？ わかりました。…ルージュ様、何か悪巧みしてませんか？」

「ふふッ！秘密よ！」

ルージュとルージュはお互い顔を見合わせると、意味ありげに微笑んだ。

猛烈に嫌な予感がするジャック。

「…また、使用人達を困らせるようなことじゃないですよね？」

「嫌ね、ジャック。私達がいつそんな真似をしたと言っの？」

ルージュは平然と囁いた。

「…お2人とも、程々にしてくださいよ?」

「わかっているわよ、ジャック。」

2人はさもおかしそうに笑うと、部屋の方へ駆けていった。

ジャックは苦笑すると、ルーシエの言った通り、厨房に向かった。否、向かおうとした。

なぜ「向かおうとした」なのかと言うと、歩き出した瞬間、とある人から声をかけられたからである。

「…まったく、ルーシエ様とルージユ様にも困ったものだな。」

金髪に緑の瞳の整った顔立ちの少年が苦笑してこちらを見ていた。

「…ヴィンス。見ていたならお2人を止めてくれればよかったのに…。」

このヴィンス　　ヴィンセントはジャックとは同じ守護者の家系（5大公爵家）の人間で、年も同じであるせいか、ジャックが初めてこの王城で打ち解けた仲の良い友人である。

ジャックも愚痴を安心してこぼせる信頼できる数少ない友人でもある。

「俺が言ったとしてもお2人が聞いてくれると思うのか?」

「…思わないけど。」

「だろっ?」

ヴィンセントはおかしそうに笑った。

「だけどヴィンス、君はルージユ様の守護者なんだから……。」

「守護者になる予定、な。まだ決まった訳じゃない。」

ヴィンスがきつちりと訂正した。

「守護者」とは白薔薇姫と黒薔薇姫というこの国の2人の王につけられる騎士のことだ。

守護者は5大公爵家の生まれで魔法使いから選ばれ、生涯、主に忠誠を誓わなければならず、身を犠牲にしても主を守る義務がある。

王の最強の盾であり、剣である。

それゆえ、守護者の特権は高く、それなりの身分が保証されているのである。

また、白薔薇姫と黒薔薇姫の位はその名の通り、女性しかつけない。この国は2人の女帝制をとっており、昔は違っていたそうだが、今では白薔薇姫は表の権力を、黒薔薇姫は裏の権力を支配していた。

今の白薔薇姫の位はルーシエとルージユの叔母であるエカテリーナ・ジェーン・アルフォードが、黒薔薇姫の位はその実妹であるリーライナ・ジェーン・アルフォードが即位している。

ルーシエとルージユの実父にして帝国宰相でもあるクラウド・ジェーン・アルフォードはエカテリーナの実弟にあたる。

「それはそうだけど…」

「それにそんなことを言うならお前だってルーシェ様をお止めしろよ。未来の白薔薇姫の守護者様？」

「それこそまだ予定、だよ。」

ジャックは苦笑いした。

5大公爵家の1つ、ベルンシュタイン家の次男として産まれた時から白薔薇姫の守護者となることがほとんど決まっているのだ。

ただし、守護者となるには剣技や魔術、その他多様な学問において優秀でなければならぬ。

正直な話、ジャックは自信がなかった。

もしも守護者に不適合と見なされたら、貴族としての身分を失ってしまう、すぐにも城から叩き出されてしまうことだろう。

10

「そうか？ お前はルーシェ様のお気に入りだし。心配ないんじゃないか？」

ヴィンセントが気楽そうに言ってくれた。

「そうだと嬉しいけどね…」

ジャックは肩をすくめて歩き出した。

「おい、待てよ！どうせなら一緒に行こう。同じ場所に行くんだし。」

ヴィンセントが後ろから追いかけてきた。

「ヴィンスは先に行った方がいいんじゃない？ルージユ様のご命令だし。」

「何か心臓に悪そうなことが起こりそうな予感がするんだよ。1人で行ってダメージを受けるより、お前と一緒に行って半分のダメージを受けた方がまだマシだ。」

「なるほどね。」

ジャックとヴィンセントは互いに苦笑いすると、2人は一緒に厨房に向かって歩いていった。

## 第2話 森へ

「遅いわ2人ともッ！」

ルーシエ様とルージュ様の部屋に入った俺とジャックの聞いた第一声はルーシエ様の怒りの叫びだった。

「ルーシエ、2人に部屋にきてって言うてからまだ10分くらいしか経ってないわ。」

ルージュ様が冷静に口をはさんだ。

「うっ…。でも私達の命令なんだから1分でくるべきだわッ！」

ルーシエ様が無茶苦茶なことを言う。

「…1分って…。」

ルージュ様も呆れたようにルーシエ様を見た。

厨房からこの部屋まで1分でこれる者はもはや人間ではない。

ルーシエ様はそんなルージュ様の視線を完璧に無視してジャックを叱っていた。

「ジャック！貴方は私の守護者となるのだからこれくらいのことではできるようになさいッ！わかった？」

「は、はいっ、ルーシエ様！」

ぴんつと背筋を伸ばして返事をするジャック。

そんなジャックをルージュ様が気の毒そうに見つめていた。

「…ルーシエ、もうそれくらいにして。はやく行かないとお姉様達が来てしまうわ。」

ルージュ様が助け船を出した。

ジャックが凄くキラキラとした瞳ですがるようにルージュ様を見つめているのが実に印象的だ。

「あ、そうだったわね。」

ルーシエ様がぐるりとルージュ様に向き直った。

後ろでジャックがほっとため息をついた。

「ヴィンセント、貴方には言っていなかったのだけど、今日はお夕食にお姉様とアングくるの。」

「あ、そうだったんですか…。」

ヴィンセントはそう答えたが、もちろんそのことは知っていた。

先ほどジャックと2人の会話を聞いて（盗み聞き）していたので。ただ、それを言うと怒られてしまいそうなので黙っていることにする。

「ルージュ、ヴィンセント！それにジャック！さっそく行くわよっ

！」

ルーシエ様が言った。

「ルージユ様、どこかへ出かけるのですか？」

「ええ！森にねッ！」

ルージユ様が可愛らしく片目を瞑って言った。

「えっ！俺達だけでですか？」

ルージユ達が行こうとしている森とは、この城のすぐそばにある広大な樹海のことである。

城の管理下にあるため、賊などの心配はないが、自分達だけで入ってしまったては迷ってしまう恐れがある。

「ええ、私達だけで、よ。」

「ルーシエ様、ルージユ様、お考え直してください！あの森に自分達だけで入るのは自殺行為で…むぐ」

ジャックが懸命に止めようとしたが、その口はルーシエ様によって塞がれてしまった。

「ジャックはそんなこと考えなくて良いのッ！森の中でジャックとヴィンセントに良いものを見せてあげるわ！」

ルーシエとルージユは互いに顔を見合せ、悪戯っぽく微笑んだ。

「行くわよッ！」

その言葉を最後にルーシエとルージユはいきなり窓から飛び降りた。この部屋は城の最上部にあり、窓から飛び降りようものなら普通は即死であるにもかかわらず、である。

「ルーシエ様ッ！」

「ルージユ様ッ！」

ジャックとヴィンセントは慌てて窓に駆け寄り、外を見下ろした。

するとルーシエとルージユがものすごいスピードで落下している最中だった。

「ルーシエ様ッ！！」

ジャックが悲痛な叫びをあげた。

しかし、それは無用な心配だったようだ。

途中で2人の落下スピードが減少し、2人は無事に地面に降り立った。

ジャックとヴィンセントは互いになほっとため息をついた。

ジャックは気が抜けたのか、後ろに倒れてしまった。

「ふふっ！びっくりした？」

下からルージユの得意気な声が響いた。

「…ジャック、大丈夫か？」

「…うん、大丈夫。驚いただけだから。」

ヴィンセントはジャックに手を貸して立たせると、ルージユに怒りをこめた声音で返事を返した。

「…ええ、とても驚きましたよ。俺とジャックの寿命が軽く10年くらいは消し飛ぶくらいに。」

「あら、ヴィンセント。怒ってばかりじゃそれこそ寿命が短くなるわよ?」

こんどはルーシエが言い返した。

…笑いながら。

怒らせるような真似をさせるのは誰のせいなのかと色々と言ってやりたいことはあったがぐっと我慢する。

この2人には何を言っても無駄である。

「ルーシエ様…。」

「あら、ジャック。どうしてそんなに疲れたような顔なの?」

ルーシエが不思議そうな顔で　おそらく本心である　言った。  
　　言った。

「お願いですから、もうこんな真似はしないでください……。」

「ッ！ 馬鹿、ジャック！」

ヴィンセントは慌ててジャックを止めたが遅かった。

ジャックは切実そうな声音でルーシエとルージュに頼んでしまった。

「えー、どうしようかな？ルージュ？」

「そうね……。またやりましょうか。」

2人はニヤリと何かを企んでいるような笑みを浮かべた。

「…ジャック。お前は…。」

ヴィンセントは頭を抱えた。

あの2人があんな笑みを浮かべるとろくなことがない。

「え…あ…。ゴメン、ヴィンス！」

ジャックはようやく自らの失言に気づいたようで、みるみるうちに真っ青になった。

「ジャックーヴィンセント！はやく降りてきなさいっ！」

下からはルーシエの声が響いた。

「…いや、良いよ。」

ヴィンセントは投げやりに呟いた。

どうせこの部屋にきたときから悪い予感はしていたんだ  
と己に言い聞かせる。

「…ヴィンス、とりあえず行こう。お2人だけで森へは危険だから。」

ジャックは一応、立ち直つたらしく、扉の方へ歩いていった。  
しかし、その歩き方は右足と右手が同時に動くという不自然なもので、シヨックからまだ完全には立ち直っていないらしい。

「…ああ、そうだな。」

ヴィンセントもジャックの後を追った。

さすがに窓から飛び降りるなどという危険な真似をしようとは思わなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2384ba/>

---

白薔薇姫と黒薔薇姫

2012年1月9日00時48分発行